

## ラジオで目撃する戦争

— BBC の「戦争実況」への挑戦がもたらしたもの —

飯塚浩一

### Witness the War through the Radio

: What the BBC's 'War Actuality' brought from the Battlefields of World War II

IIZUKA Koichi

#### Abstract

In the British broadcasting history, it has ever been said the BBC's biggest success in World War II was to have observed the policy to convey the truth rather than the propaganda. The studies in Japan has been focusing on what BBC told (or what not told) in reporting the war, so that the research subject has been the effects of BBC's programmes listened by the audience in Britain, the occupied Europe, and the British Empire.

However it also should be important to consider how the BBC had shown the war in order to study its role in the war reporting. To maintain the morale of the British people, it was essential for the BBC to get the reliance from the audience, in other words, to make British audience sensitized to the war broadcast and to appeal their emotions fighting with the troops in the battle front. Besides it must have been the mission for the BBC to serve the all audience and act in the public interest.

I will describe in this essay, through the several main stages, the process from the BBC's preliminary activity for the 'war actuality' to the opening of the 'War Report' programme, and show the characteristic of the war reporting journalism generated by the 'BBC's War Reporting Unit'.

#### 1. はじめに

英国放送史において英国放送協会 (British Broadcasting Corporation : 以下、BBC) の第二次世界大戦中の最大の成功と言われているのは、プロパガンダよりも事実を伝えるという方針を守ったこと、虚偽の事実を伝えることを拒否し、事実の解釈が歪曲されることを避けることで、敵側の放送局に対して有利な地位を得たことである<sup>1)</sup>。悪いニュースを伝えたが故に—1942

年11月のエル・アラメイン(El Alamein)での勝利<sup>2</sup>までは悪いニュースしかなかった一良いニュースもまた信用され、占領下にある大陸諸国の人々からも頼りにされることになった。

こうした評価は、BBCが特に戦争報道において「何を伝えたか(あるいは、伝えなかったか)」に着目しており、日本では、英国国民や占領下にあるヨーロッパの国々の人々、大英帝国の植民地や自治領の人々がBBCの番組を聴くことが英国のプロパガンダ政策や戦争遂行政策全般に及ぼしたのか、という視点から考察がなされてきた<sup>3</sup>。しかしながら、BBCの戦争報道が果たした役割を考察する上では、「どのように伝えたか」も重要である。オーディエンスにとっての戦争とは、メディアから提示された戦争であり、それが事実であるかどうかの判断は自身で下すことはできない。それを伝えたメディアを信頼するしかないのである。

BBCにとって、オーディエンスの信頼を得る、言い換えれば、メディアが伝える戦争への注目を集め、前線の兵士だけでなく国民全体が一体となって闘っているという感情を掻き立てることが、国民のモラル—戦争遂行のための忍耐と貢献—を維持するためには必要不可欠であった。またそうすることがBBCにとって公共サービスの使命—すべてのオーディエンスに奉仕するべく、公益に適う活動をする—を果たすことを意味した。

では、BBCはどのようにやってオーディエンスの感情を掻き立てたのか？ それは、BBCが任命した戦争特派員(war correspondent)から構成され、連合軍の各部隊に埋め込まれた(embedded)「戦争報道チーム」(War Reporting Unit)の創設と、特派員が戦場からロンドンへ送って来る「実況」(actuality)を柱とする番組「ウォー・レポート」(War Report)の開始であった。日本ではこれまで、BBCの戦争特派員の活躍や「ウォー・レポート」の特徴について簡潔な紹介は行われているが<sup>4</sup>、「戦争実況」(war actuality)がなぜ必要とされたのか、どのような経緯を経て、どのような形で実施されたのかの詳細は考察されていない。

そこで本稿では、BBCの「戦争実況」への取り組みの開始から、D-Day(ノルマンディー上陸作戦(Invasion of Normandy)<sup>5</sup>の決行日)からの「ウォー・レポート」の開始に至る過程を、主要な展開場面のいくつかを取り上げつつ、BBCが生み出した戦争ジャーナリズムとはどのようなものだったのかを描き出すことにしたい。なお、アナウンサーによって「読み上げられる戦争」ではなく、戦争特派員が「目撃する戦争」がどのようなものであったかをできるだけ実態に沿って表現するため、ドキュメンタリー番組『戦争と放送 The BBC at War 第二次世界大戦におけるBBCの闘い：日本語字幕・英語字幕版 2(戦場での挑戦)』(BBC Active 制作、ジョナサン・ディンブルビー 監修・出演、飯塚浩一 日本語字幕版監修、丸善出版、2016年)のなかで引用されている実況を、筆者が監修を担当した日本語字幕から抜粋して紹介する<sup>6</sup>(本稿で字幕を引用する際には、引用の最後に(The BBC at War)と記載する。なお、字幕の文字数の関係で特派員の言葉が省略されている箇所がある)。

## 2. 「戦争実況」への挑戦

1942年11月4日、BBCは国内放送(Home Service)と軍向け放送(Forces Programme)のオーディエンスに対して、ここ数年間でもっとも良いニュースに備えて待つように伝えた。

午後 11 時、アナウンサーは「こちらロンドン、ブリース・ベルフレイジ (Bruce Belfrage) です。」と彼は話しかけた。「ロンメル (Rommel) は完全に退却しました。」<sup>7</sup>

これは戦争の最悪の状態が終わり流れが変わり始めたという、数百万人が長く待ち望んでいたニュースだった。ドイツ軍による空襲は依然として続いていたものの散発的になっていたし、ソ連軍はスターリングラード (Stalingrad : 現 ヴォルゴグラード Volgograd) で持ちこたえていた。北アフリカのエル・アラメインでの勝利は、何ヶ月も敗北続きだった連合軍にとって長く待ち望んでいた勝利だった。それから後の話題は、いつ、どこで、どうやって第二戦線 (Second Front)<sup>8</sup> が開かれ、占領下にあるヨーロッパからドイツ軍が撃退されるのかであった。D-Day は、単に歴史上で最大の侵攻作戦であったのみならず、英国国民にとっては包囲された状態にあった年月からの解放を意味したからである。

1944 年 6 月 6 日、世界の人々が D-Day が始まったことを知ったのは BBC の報道によるのである。ノルマンディー上陸の最初の公式アナウンスは同日の午前 9 時 32 分から BBC で放送され、アナウンサーはジョン・スナッグ (John Snagge) であった<sup>9</sup>。戦争は新しい段階に突入した。そして BBC のニュース報道もまた同様であった。特別番組「ウォー・レポート」は国内放送の同日夜 9 時のニュース (Nine O'clock News) に続く国王の演説の直後、9 時 19 分からの第 1 話から、1945 年春の短期間の休止を除いて毎晩放送され、リューネブルガーハイデ (Lüneberg Heath) でのドイツ軍降伏の翌日の 1945 年 5 月 5 日、第 235 話で終了した。同番組は多彩な形式によって、連合軍の複雑で、そしてしばしば悲惨な戦いをオーディエンスの「視覚」にも相当するインパクトをもって伝え続け、高い評価を受けたが、この番組が開始されるまでに BBC は様々な課題に挑戦し、困難を乗り越えねばならなかった<sup>10</sup>。

### 1) ベルリン空襲 (air-raid over Berlin) の実況

第二次世界大戦勃発直後の 1939 年 9 月半ばに 2 つの国内放送委員会 (Home Broadcasting Committee) が設置された。一つは BBC 内部に置かれ、もう一つは BBC と各省の代表者で構成されたものであった。このうち BBC 内部の委員会の 2 回目の会合で、番組担当管理官 (Controller (Programmes)) のバズル・ニコウルズ (Basil Nicolls) は BBC の番組編成に数多くの変更が加えられることを告げた。日曜日にも子供の時間 (Sunday Children's Hour) を創設すること、より多くの重厚な (serious) 音楽を流すこと、戦争について毎週のトーク番組を創設すること、外交問題 (foreign affairs) に関する定期的なトーク番組を始めること、「実況」 (actuality) 番組のシリーズを開始すること、数多くの「郷愁を誘う特集番組」 (nostalgic feature) を流すことであった<sup>11</sup>。

戦争が続くにつれて、ニュース速報は 1940 年 7 月に始まった拡大ニュース番組「ラジオ・ニュースリール」 (Radio Newsreel) によって補われるようになった。「ニュースリール」はニュース映画から借りてきた用語であり、BBC がニュース速報のなかに実況 (actuality) を持ち込みたいという熱意を示している。同番組は海外放送 (Overseas Program) で 1 日 4 回、週 6 日の編成で放送された。単にその日のニュースを物語るのではなく、意識的にニュース映画の雑誌風のスタイルを援用しつつ、「ラジオ放送向きの」 (radiogenic) 物語を選び出し、生き生き

と変化に富む構成で放送された。ニュースの読み上げ、特派員報告、インタビュー録音、ニュースに深みと展望を与える解説が組み合わせられ、直接性 (immediacy) の感覚が常に優先された<sup>12</sup>。「ラジオ・ニュースリール」において最も貴重なものは常に前線からの目撃報告であり、この形式が後に始まる「ウォー・レポート」のモデルになったことは間違いない。

1942年の始め、屋外中継部長 (Director of Outside Broadcasts) のマイクル・スタンディング (Michael Standing) はニコウルズへ手紙を出し、公式な特報や目撃報告に頼る代わりに、戦時作戦 (wartime operation) に随行して「実況録音」 (actuality recording) を行うためにマイクロフォンを用いる計画を起案すべきだと提案した<sup>13</sup>。『ランダムハウス英和辞典 (第2版)』によれば、「actuality」には「現状、実状、実態、現実 (性)」という「reality」と同様の意味の他に、「(テレビ・ラジオの) 実況放送」という伝える主体としての行為が含まれている。BBCが求めていた「actuality」とは、オーディエンスに現実性を感じさせるために「マイクを通じて戦争を目撃させる」ことだった。それは、戦争特派員の主役の座を放送記者が新聞記者から奪うことでもあった。その最初の機会は1943年1月17日の英国空軍によるベルリン空襲時に訪れた。

この空襲の任務に当たった空軍中佐ガイ・ペンローズ・ギブソン (Guy Penrose Gibson) はラジオの潜在的な力に気づいており、BBCの特派員が自分の爆撃機に搭乗すべきだと主張した。そこで当日、英国空軍を最初に担当していたリチャード・ディンブルビー (Richard Dimpleby) が、第106飛行隊の爆撃機に搭乗し、戦場がよく見えるように爆撃手と一緒に機体の前方に座ることになった。その時の実況録音が残っている<sup>14</sup>。

ベルリンに近づくとー

強力なサーチライトと激しい対空砲火が

一瞬も目が離せません

次々と焼夷弾が落とされました

ドイツ首都の暗い地表にー

巨大で眩い炎が広がっていきました

この破壊された地のどこかのシェルターの中にー

ヒトラーのような男が潜むのでしょう

ーリチャード・ディンブルビー (The BBC at War)

これはディンブルビーにとってもオーディエンスにとっても驚きの体験だったはずである。とりわけオーディエンスは、ドイツが空襲を受ける様子をラジオを通して「耳で目撃する」ことになった。ディンブルビーの実況は軍幹部たちに好評であり、この後も空軍機に搭乗して実況を行うことになった<sup>15</sup>。

1943年9月4日には、BBCの戦争特派員ウィンフォード・ボーン・トーマス (Wynford Vaughan-Tomas) が英国空軍のランカスター爆撃機 (Lancaster bomber、ニックネームは「Freddie」の「F」) に録音エンジニアのレグ・ピッツリー (Reg Pidsley) と共に搭乗した。

彼らの任務は戦争の実相を捉えて英本国のオーディエンスへ伝えることだった。彼らが搭乗する爆撃機はイギリス海峡を横断し、オランダ上空を経てドイツへ侵入し、最終的にはベルリンへと向かった。爆撃を行って無事に帰国するまでの8時間は「これまでの人生でもっとも恐ろしい8時間」だったと、後にトーマスは語っている<sup>16</sup>。

彼の隣に座るピッツリーは、航空機の音、クルーの声、そして爆弾投下と敵の陣地からの対空砲火についてのトーマスの情感あふれる解説をディスクに録音し、そのディスクを、爆撃機のなかの凍えるような寒さと爆弾を投下する際の急激な揺れから守るためにジャケットのなかへ押し込んだ。翌日に行われたニュース速報のなかでこの録音が再生され、世界中に夜間爆撃の恐ろしさを伝えた。これは今に至るまで、戦争についての現場ジャーナリズム (on-location journalism) の歴史においてもっとも重要な場面の一つであり続けている<sup>17</sup>。

## 2) 「戦争報道チーム」(War Reporting Unit) の編成

「ラジオ特別チーム」(Radio Commando Unit) を編成しようというアイデアは、1942年11月にドイツが北アフリカ戦線で敗北し、その数か月後にスターリングラードから撤退し、第二戦線の展望が見えてきた時に浮上した。1943年3月、英国軍はD-Dayに向けた作戦と装備を試すための軍事演習(作戦名スパルタン Spartan) をオックスフォードシャー (Oxfordshire) で行ったが、BBCにとっては軍の上級幹部たちに自分たちが迷惑にならずに参加できることを証明する絶好の機会だった。BBCは演習を取材できるように軍に掛け合い、軍がついに折れて、ディンブルビーが率いる特派員とエンジニアからなる2つのチームが敵味方に分かれて対峙する両軍に従軍することが許された<sup>18</sup>。

演習が行われている間、エンジニアは戦闘の音を、記者は目撃証言を録音し、ロンドンの放送会館 (Broadcasting House) へ送った。詳細なチェックと検閲を受け、あたかも実際の番組編成に合わせて放送するがごとく偽のニュース速報を偽の期限のために急いで仕上げた<sup>19</sup>。台本のなかに「解放された都市」からディンブルビーが送った実況を文字に起こしたものがある。

ここはオックスフォード  
 敵がこの街から撤退した後—  
 我が軍が入りました  
 住民は落ち着いて見守っているようです  
 敵が撤退する時  
 住民は家に閉じこもりました  
 そして美しく古い橋が次々に爆破される音を—  
 聞いていたのです  
 —リチャード・ディンブルビー (The BBC at War)

戦争省 (War Office) と軍の司令官たちは、その偽のニュース速報を聞いて深い感銘を受け、BBCは今後、出来る限り多くの便宜を与えられるべきだという結論に至った。しかし、同省は、

もし BBC が大勢で戦場に赴くことを許されるとすれば、特派員たちは戦闘行為に合わせた準備をしなくてはならないと強調した。同様の見解は、ディンブルビーが提出した内部報告書でも表明されていた。そこで彼は「(特派員が) 軍人としての規律と姿勢を意識する」必要性を語った。彼は、演習の間、彼に付き添った若いエンジニアがフィールドキャップをかぶっていたのに加えて、ひっきりなしにタバコを吸っていたのみならず、兵士から上級将校まですべての軍人を「おっさん」(old boy) と呼んでいたことに憤慨していた<sup>20</sup>。

こうして第二次世界大戦の勃発から3年半後、BBC は大規模かつ自由に戦争を報道できるようになった。しかしながら、1943年の秋に連合国軍最高本部 (Supreme Headquarters of the Allied Expeditionary Forces : 以下、SHAEF) が設置され、ドワイト・デイヴィッド・アイゼンハワー (Dwight David Eisenhower) が最高司令官 (Supreme Commander) に任命された時、SHAEF は当初、BBC は新聞の合同代表取材 (Press pool) のなかに入れてほしいと要求しているだけであって、「ラジオ特別チーム」の計画は何の役にも立たないだろうと考えていた。そこで BBC は、自らの役割は米国の放送ネットワークと同等ではなく、英語圏に英国の声を伝えているのであり、あらゆる戦場の連合軍兵士に向けてのみならず、解放すべき国々の人々に向けたものであると主張した。アイゼンハワーは BBC を連合軍に組み込む仕組みが有効であることに同意した<sup>21</sup>。

演習の2か月後、「戦争報道チーム」が設置されることになり、屋外中継の経験が豊富な BBC 帝国番組部長 (BBC's Director of Empire Programmes) のシーモア・ドゥ・ロッベニア (Seymour de Lotbiniere) が最初の責任者となった。彼は直ちに有名な解説者であるハワード・マーシャル (Howard Marshall) をチームの部長として採用し、さらに、マルコム・フロスト (Malcolm Frost) —1939年にBBCの傍受部門を設立し、その後はMI5 (Military Intelligence Section 5 軍情報部第5課) に勤務していた—を次長として採用した。フロストは20名ほどの特派員を採用し、そのなかにはディンブルビーの他、フランク・ギラード (Frank Gillard)、カナダ人のスタンリー・マクステッド (Stanley Maxted)、オーストラリア人のチェスター・ウィルモット (Chester Wilmot) が含まれていた<sup>22</sup>。

「戦争報道チーム」のメンバーは、その後数ヶ月間、軍の訓練指揮官によって前線で生き残るための訓練を施された。彼らは射撃、信号、偵察、航空機と戦車の認識方法、そして地図の読み方を学んだ。さらに緊急の際には、自分自身で録音装置を使用できるようにエンジニアの技術も教えられた<sup>23</sup>。1944年5月の終わりに残された作業は、彼らを D-Day のために配置された連合軍の部隊に埋め込むことであった。

### 3. 「ウォー・レポート」の開始と終了

#### 1) 「マイティ・ミジェット」(The mighty Midget) の開発と活用

オーディエンスへ最も正確でタイムリーな戦場からの報告を提供するために、BBC は D-Day までに新しい録音装置と新しいコミュニケーション回路を開発しなければならなかった。克服すべき課題は北アフリカ戦線の報道で明らかになっていた。砂漠で屋外にいることは、適切な

タイミングでロンドンへ報告を戻すことを困難にした。何を録音するにしても、エンジニアたちの助けを必要とする重量トラックに乗せられた録音機材を利用しなければならなかった。多くの収録物は機械装置のなかに入り込んでくる砂によって台無しになり、近くで銃が発射されれば録音盤を刻む針もまた録音盤を叩くことになった。録音盤が最終的に編集された時、それはカイロまでの全行程をバイク便 (dispatch rider) で運ばれる必要があり、ロンドンへ向けた指向性電波 (beam) の発信予定の一つに乗せるまでに 4 人もの検閲官による検閲を通過する必要があった。さらに送信後ですら、空電によって伝わらない危険性もあり、ようやく伝わったとしても、最終的にはロンドンの別の記者によって再び録音し直される必要があった<sup>24</sup>。D-Day の前まで、BBC の報道態勢は米国の放送局のそれと比べて、すべての点において悲惨な状態だった。そして、英国政府は、もしこうした状況が第二戦線でも繰り返された場合、英国軍の努力が米国軍の成功についての報道によって、完全に影が薄くなってしまわないかと危惧した<sup>25</sup>。

BBC のエンジニアたちは D-Day を記録するための新兵器を開発した。それは「マイティ・ミジェット」(強力な小型機) と呼ばれる持ち運びができる録音装置で、ラジオによる戦争報道の形を変える代物だった。木製のケースにバッテリーとともに収められ、クリップ付きマイクロフォンと 12 枚の 25 センチメートルの両面ディスクが備え付けられており、それぞれのディスクは片面で 3 分以内の録音ができた。重さは 18 キログラムあり、何とか背負って運べるものの、壊れやすく、再生ができないので録音されているかどうかを確かめる術がなかった。それでも兵士がいる塹壕に持ち込むことができた上に、高性能で 2 種類のモードを搭載しており、戦闘の音を聴かせたいときは通常モードで、戦場の混乱を聴かせたい時は遠隔モードで録音できた<sup>26</sup>。

1944 年 3 月、「戦争報道チーム」の特派員たちは上述した訓練を受けただけでなく、どうやって不自由な生活に耐え、野外で料理をするのかも学んだ。軍服も支給された。すべては彼らを自給自足できるようにするだけでなく、彼らが埋め込まれる部隊の兵士たちから尊敬を勝ち取るためでもあった。一方、エンジニアたちは、前線からの特派員の報告をいつでもできる限り早くロンドンへ送ることを可能にするために、専用の電話線と放送機 (transmitter) からなるネットワークを構築しつつあった。この計画の中には、グレイト・ヤーマス (Great Yarmouth) からプリマス (Plymouth) までの海沿いにくつかの「供給」(feed-in) 地点を設置することも含まれており、さらにイングランド南部に散在する放送局のいくつかにマイクロフォンとディスク装置を配置し、放送会館への特別回線を敷設した。最後に、前線での利用に適した移動可能な放送機がトラックに積み入れ、出航のための準備が行われている場所へと運ばれた<sup>27</sup>。

## 2) D-Day と「ウォー・レポート」の開始

戦争中、英国の新聞社はいかなる戦場においても、特派員の配置は 1 名に限られていた。そして、それは D-Day でも変わらなかった。しかし、連合軍がヒトラーの「大西洋防衛線」(Atlantic Wall) に対して攻撃を開始した時、17 名の BBC 特派員が「マイティ・ミジェット」を携行してノルマンディー海岸へと向かった。1939 年の時点では、ニュース報道について BBC は新聞

所有者の奴隷のような立場にあったが、状況は劇的に変わった。ギラードは後に「ノルマンディーでわれわれは軍隊だった」と語っている<sup>28</sup>。

1944年6月6日、朝9時32分からのスナッグによる公式アナウンスの後、オーディエンスに対してノルマンディー海岸で実際に起こっていることをもっと告げることができるようになるまで、BBCは苦痛を伴う時間を過ごした。他方で、公式アナウンスが行われた時点で「戦争報道チーム」の大半のメンバーは既に戦場に到着していた。ディンブルビーを含む何人かは爆撃機や戦闘機に搭乗してイギリス海峡を横断した。7名は様々な船舶や上陸用舟艇に乗船してノルマンディー海岸へ向かった。マーシャルを含む3名は海岸で戦闘状態にある強行上陸部隊に組み込まれていた。ウィルモットはグライダーで到着した。バイアムは空挺部隊とともにパラシュートで降下した。ロビン・ダフ (Robin Duff) も同様にパラシュートで降下する予定だったが、最終的には米軍の艦船に乗船して到着した<sup>29</sup>。

夜になって英国の国内放送のオーディエンスは、ド・ゴール将軍 (le général de Gaulle) と国王からのメッセージ、カンタベリー大主教 (Archbishop of Canterbury) の説教を聞いた。依然として前線からの報告はわずかであった。特派員たちによって戦場で録音されたディスクは、英国空軍の航空機や海軍の輸送船によってロンドンへと運ばれていた。他の方法としては、特派員たちの声は、そのいくつかは録音で、いくつかはライブの音声で、イングランドの南海岸にあるBBCの送信地点であるフェアラム (Fareham) から専用回線を通じて届くか、あるいは軍が所有する移動放送機を通じて戦場から送られてきた。それらは放送会館で取り纏められ、直ちに新しいディスクへと採録された。もし安全保障上の理由で除去されるべき箇所があれば、都合の悪い箇所を飛ばした新しいディスクのコピーが作られた。こうした作業が続く一方で、検閲官たちが容易にチェックできるようにすべての特報がタイプライターで文字起こしされた。一旦検閲を通過すれば、これらの原稿はニュース部門と番組制作チームの内部で回覧された<sup>30</sup>。

1944年6月6日の夜、英国国民は新しい番組を耳にすることになった。夜9時のニュースの直後に毎晩放送される「ウォー・レポート」である。録音技術の改善は戦場からのBBC特派員の報告に劇的な効果をもたらした。「戦争報道チーム」のメンバーは兵士と同じ訓練を受けただけでなく、熟練した編集技術を持ち、解説と実況を効果的に結び付けることができる前線特派員として、戦場における兵士たちの目線での報道を目指した。臨場感にあふれ正確で信頼性のある「ウォー・レポート」は大反響を呼び、英国国内だけでも1000~1500万のオーディエンスが定期的にダイヤルを合わせたと言われている<sup>31</sup>。

D-Dayには特派員から50本以上の報告がロンドンへ送られたが、「The BBC at War」には次の実況が「ウォー・レポート 第1話」として収録されている<sup>32</sup>。

話しているうちに落下傘兵が着地しました

海から上がってきます

これはすごい人数です

—アラン・メルビル (Alan Melville) (The BBC at War)

こちらリチャード・ディンブルビー  
英国 カナダ 米軍は一  
白昼堂々 フランスの海岸に上陸  
すでに数キロ内陸に進軍  
英米軍艦の火力支援を受け 軍は着実に前進しています  
また空からは戦闘機が常に軍を守っています  
—リチャード・ディンブルビー (The BBC at War)

D-Day より前には、BBC は「ウォー・レポート」のような番組は放送していなかった。それまでは、公式の戦況報告の後に短い戦争特報を差し込むか、間に合わせのニューストークとして戦争に時間を割り当てていた。15分間を越える場合はなかったし、大半はそれ以下であった。だが、今や戦争特報は毎日の30分番組となり、しかもその制作方法は革新的であった。「ウォー・レポート」の制作はニュース部とドキュメンタリー部のメンバーからなるチームの手に委ねられた。彼らはそれぞれの技法を組み合わせ、全ての素材を独自性のある展開の速い解説番組へと構成した<sup>33</sup>。

「ウォー・レポート」の成功は、戦場において人員と施設を効率的に展開できるかどうかにかかっていた。BBC は D-Day より前に移動可能な放送機「マイク・チャーリー・オウボウ」(Mike Charlie Oboe : コールサイン MCO) を3トントラックに積んで南部の沿岸地へと運んだ。しかし、強風が続き安全な輸送ができないと判断されたため、イギリス海峡を越えたのは6月17日であった。ノルマンディーに到着してから24時間以内に「MCO」はベイヨックス(Bayeux)の街の近くにある大邸宅の中に設置され、稼働を始めた<sup>34</sup>。

数週間後、さらに2台の放送機—「マイク・チャーリー・エヌ・エイ・エヌ」(Mike Charlie NAN : コールサイン MCN) と「マイク・チャーリー・ピーター」(Mike Charlie Peter : コールサイン MCP) —がノルマンディーに到着した。移動検閲部隊が配置されたこともあり、3台の放送機は BBC 特派員が特報をタイムリーに送る能力を劇的に改善した。しかし、常に変化する前線と足並みを揃えるのは大変だった。例えば MCO の信号はかなり弱かったため、連合軍の部隊が前進すると、その後を追って海峡沿いの海岸に沿って移動しなければならなかった。それでも、フランス北部や北海沿岸低地帯 (Low Countries : ベルギー、ルクセンブルク、オランダに当たる地域) が解放されるにつれて適応能力はより拡大した。BBC のエンジニアたちは前進中にラジオ局を探し出しすぐに修復した。修復された施設を活用することにより、特派員たちは、すべての BBC の定期的ニュース速報と「ウォー・レポート」へ迅速かつタイムリーに素材を供給することが可能になった<sup>35</sup>。

D-Day 以降も、ギラードから次の実況録音が放送会館へ送られている。

ここはトウモロコシ畑  
私たちの周りで銃撃戦が始まっており—  
人々が身を隠しています

頭上を砲弾が飛び交う音がします

ここが世界への放送拠点となる  
ノルマンディーの戦を伝える唯一の場所

—1944年6月17日 ノルマンディーから (The BBC at War)

ティイへの道は荒れ果てています  
並んでいるのは兵士の墓  
大半がドイツ兵の墓です  
どこを見ても激戦だったのが分かります  
吐き気を覚えるような光景です  
こんな荒れた場所は初めてだ  
ティイは滅びたのです

—1944年6月20日 ティイ・シュル・ソル (Tilly-sur-Seulles) から (The BBC at War)

#### 4. なぜ「戦争実況」だったのか？

第二次世界大戦勃発直後の1939年9月9日、英国の政治・文化週刊誌『ニュー・ステーツマン』(*New Statesman*) は次のコメントを掲載した。「戦争が始まった最初の数日間、BBCは朝刊各紙に書かれているニュースを単調に伝えた。そして、そのニュース自体も一時間前に伝えたものの繰り返しだった。他方で、各紙の内容もラジオで既に聴かれていたものの繰り返しだった。」<sup>36</sup>間もなく、ディンブルビーが初のBBC戦争特派員に選ばれ、フランス、北アフリカ、アルバニア、ギリシャ、そして中東から報告を送った。ゴドフリー・タルボット (Godfrey Talbot) は、1940年9月から41年5月にかけてのブリッツ (The Blitz ロンドン大空襲)<sup>37</sup>の報道を手伝っていたが、1942年、中東にいたディンブルビーと交替し、エル・アラメインからトリポリ (Tripoli) への英国第八軍 (the Eighth Army)<sup>38</sup>の進軍と、その後のイタリアへの侵攻の報道を行った。ギラードは1942年8月のディエップ空襲 (Dieppe Raid) の報道<sup>39</sup>を行った。彼はその後、タルボットとともに北アフリカとイタリアにおける第八軍の軍事活動の報道を行うことになる<sup>40</sup>。

ディンブルビー、タルボット、ギラードは、フリート・ストリート (Fleet Street 新聞街) での経験を持つ専門的なジャーナリストであり、1942年にはBBCのニュース編成室の中核を担っていた。そして、この時点まで、BBCの記者は新聞記者と同じく戦争特派員として戦況を取材し、多くのニュースは、彼らが送って来る報告をもとにした原稿をアナウンサーが読み上げていたのである。アナウンサーによって「読み上げられる戦争」は、距離と時間の隔たりを前提として、起きたことを正確かつ効率的に伝達することを目的としていた。

他方で、1940年のダンケルク撤退 (Dunkirk)<sup>41</sup>と1940-41年のブリッツを経験した人々は、放送に対してより「生きた」ニュース—時間と距離の隔たりをできるだけ感じさせないニュー

スーを切望するようになる。英国の社会調査機関「マス・オブザベーション」(Mass Observation)が、1941年の時点において最も重要な情報メディアはラジオであり、戦争末期までには、ある種のニュース、特に戦闘に関する即時の解説については新聞に取って代わっていた、と報告したように<sup>42</sup>、第二次世界大戦は「即時性」(topicality)をBBCにとっての中核的なニュース価値にしたのである。

「即時性」を有するニュースを提供するため、BBCは「起きたこと」を伝えるだけでなく、「目の前で起こっていること」を伝えたいと欲し、1940年7月に「ラジオ・ニュースリール」を開始し、1942年11月には「ラジオ特別チーム」を編成するアイデアが浮上した。1943年のベルリン空襲の実況と軍事演習(スバルタン作戦)における偽の実況を経て「戦争報道チーム」が設置され、1944年6月6日のD-Dayに、特派員たちは爆撃機で、グライダーで、パラシュートで、上陸用舟艇で戦場のただなかに飛び込み、目前で繰り広げられている戦闘を見たままの感覚で発話する「目撃する戦争」(「ウォー・レポート」)を1945年5月5日まで伝え続けた。

もちろん、こうした「視覚」にも相当するようなインパクトを持つ「実況」という表現形式を可能にするためには、「戦争報道チーム」という組織編制だけでなく、新たな録音装置やコミュニケーション回路の開発も必要だった<sup>43</sup>。BBCのエンジニアたちは持ち運びができる録音装置「マイティ・ミジェット」を開発し、英国内に専用の電話線と放送機からなるネットワークを構築し、ノルマンディーからの放送ができる「マイク・チャーリー・オウボウ」など3台の移動可能な放送機を配置した。さらに、連合軍が解放した地域にあるラジオ局を次々に修復して迅速な「実況」を可能にした。

こうして「実況」という表現形式と、それを支える「戦争報道チーム」という組織編制とエンジニアによる技術支援が組み合わさることで、オーディエンスに「ラジオで目撃する戦争」を提供する新たな戦争ジャーナリズムが生み出されることになった。

## 5. おわりに

1945年5月5日の「ウォー・レポート」の最終回では、ウィルモットがリュネブルガーハイデでのドイツ軍の降伏の様態を伝えた。

私はチェスター・ウィルモット  
 ここは陸軍元帥司令部です  
 場所はエルベ川近辺のリュネブルガーハイデ  
 今は5月4日金曜日6時10分  
 敵対していたドイツの司令官たちが—  
 降伏のために司令部にやってきました  
 —1945年5月4日 (The BBC at War)

BBCは戦争勃発当初、政府によるプロパガンダ放送の要求に対峙しつつ、自らの使命をどう捉えればよいのかに逡巡しているうちに、大衆からの支持を失っていった。開戦の一か月後にBBCの聴取者調査局(Listener Research Department)がオーディエンスの反応を調査したところ、オーディエンスの35パーセントがBBCに不満を持ち、10パーセントは全く聴かないと回答した<sup>44</sup>。BBCはこの危機において戦争をどのように伝えるかをめぐって苦悩した結果、戦場に飛び込み、言葉を武器に闘うこと、すなわちエイサ・ブリッグス(Asa Briggs)が「言葉の戦争」(The War of Words)<sup>45</sup>と呼んだ役割を果たすことでオーディエンスの信頼を獲得する道を選んだ。

D-Dayから始まった「ウォー・レポート」は、BBCの戦争特派員を有名にし、BBCのジャーナリズム活動に対する高い評価を確立した。ただしこのことは、危機において放送は何をしなければならないのかについての見解を共有していた数百名のBBCの職員を含む、これまであまり知られていなかった計画、訓練、工学技術、管理運営の仕組みなしには起こりえなかった<sup>46</sup>。なかでも鍵となったのは、特派員による「実況」を可能にした持ち運び可能な録音装置「マイティ・ミジェット」の開発と、特派員たちをD-Dayに始まる侵攻部隊に「埋め込んだ」ことだった。

戦時においてジャーナリストが前線の部隊に従軍するという報道形式は、2003年3月に勃発したイラク戦争において実施され、日本人記者も米軍部隊に従軍したことで注目を集めた。大石悠二は2003年2月3日に米国防総省が公表した取材の手引きの「最大の眼目は、報道者(記者、カメラマン、キャスター)に最前線の戦闘部隊に従軍を認め、戦場からの直接報道(印刷媒体の送稿、電波媒体の音声と映像の中継放送)を許し、さまざまな制限はあるものの、建前としては軍事検閲を廃止したことである」<sup>47</sup>と指摘している。

イラク戦争時の「埋め込み」報道と、第二次世界大戦においてBBC特派員が「埋め込まれ」て行った報道は、「報道者は文字通り最前線の部隊に埋め込まれ、兵士と寝食を共にし、そして戦闘に際しては生死も共にする」<sup>48</sup>点は共通だが、その報道の目的と性格は大きく異なっていた。すなわち、イラク戦争時における「埋め込み」報道において、従軍する記者、記者を派遣するメディア組織、そしてその報道を検証する者にとって最大の課題と考えられたのは、ジャーナリスト、あるいはジャーナリズムの客観性をいかにして維持するか、ということであった。

ところがBBC特派員による「埋め込み」報道は軍による検閲をも組み込んだ仕組みであることに加え、戦争を第三者的に報道するものではなかった。自ら連合軍の一員として言葉を武器として戦うために、BBCは従来の新聞記者による従軍取材とはまったく異なる報道形式を自ら考え、政府や軍を説得し、実現させた。それはまさに「戦場に埋め込まれた」報道であり、BBCが名声を得た「プロパガンダよりも事実を伝えるという方針」とは別に、戦場を「実況」することでオーディエンスの感情を掻き立て、国民のモラルを維持するというジャーナリズムを生み出したとも言えよう。

今後の課題は、戦後のテレビジョン時代において再び戦争に向き合うことになったBBCが、第二次世界大戦下での経験をどのように受け継ぎ、また変容させたかを考察することになるだろう。

## 註

- 1 例えば、次の文献を参照 — 坂本勝編著『BBCの挑戦』（NHK出版、1995年）47頁、蓑葉信弘『BBC イギリス放送協会 パブリック・サービス放送の伝統』（東信堂、2002年）31頁。
- 2 第二次世界大戦の北アフリカ戦線における枢軸国軍と連合軍の戦い。第一次会戦は1942年7月1日から31日。第二次会戦は同年10月23日から11月3日。11月4日、バーナード・モントゴメリー（Bernard Montgomery）が率いる連合軍がエルヴィン・ロンメル（Erwin Rommel）が率いる枢軸国軍を撃退した。
- 3 津田正太郎「「聴く」プロパガンダ — 第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策（上）—」（『社会志林』第65巻第3号、2018年2月、法政大学社会学部学会）、津田正太郎「記憶をめぐる戦い—第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策（中）—」（『社会志林』第66巻第3号、2019年12月、法政大学社会学部学会）、津田正太郎「「ノープロパガンダ」の実相—第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策（下）」（『社会志林』第68巻第2号、2021年9月、法政大学社会学部学会）。
- 4 平野次郎「第10章 BBCの戦争報道」（原麻里子／柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』ミネルヴァ書房、2011年）211-212頁、小林恭子『英国メディア史』（中公選書、2011年）194頁。
- 5 第二次世界大戦中の1944年6月6日、連合軍によって行われた北西ヨーロッパへの侵攻作戦。落下傘部隊の降下、グライダーによる上陸、空襲と艦砲射撃、上陸用舟艇による敵前上陸が実施された。
- 6 英語話者が英語での語りを聞く場合とは異なるが、参考として紹介する。
- 7 David Hendy, *The BBC: A People's History*, Profile Books Ltd, 2022, p.256.
- 8 ドイツ占領下にあるヨーロッパを解放するための戦線。1941年から作戦が練られ、1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦によって実行に移された。
- 9 実際には、キャブシュム（Caversham）にあったBBCの傍受部門（Monitoring Service）が傍受したドイツの支配下にあるラジオ局が伝えた連合軍上陸のニュースがBBCのニュース編集部へ届けられ、フレディー・アレン（Freddie Allen）が午前8時のニュース速報（bulletin）で連合軍の空挺部隊がフランスに降下しつつあると伝えていた。このニュース速報は検閲によって禁止されなかったものの、情報省（Ministry of Information）は「秘密を洩らした」としてBBCを非難した。David Hendy, op.cit., pp.269-270. 及び Robert Seatter, *Broadcasting Britain: 100 years of the BBC*, BBC, 2022, p.63. 参照。
- 10 David Hendy, op.cit., pp.274-275. 及び David Hendy, War Report, *History of the BBC: The BBC and World War Two* (<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/war-report>) 参照。なお、1942年の時点でBBCの幹部たちは、戦場から報告をする能力は米国やドイツの放送局と比べてはるかに劣っていることを認めていた。David Hendy, D-Day, *History of the BBC: The BBC and World War Two* (<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/d-day>) 参照。
- 11 Asa Briggs, *The History of Broadcasting in the United Kingdom Volume III: The War of Words 1939-1945*, Oxford University Press, 1995, p.93. 参照。
- 12 Andrew Crisell, *An Introductory History of British Broadcasting*, Routledge, 1997, p.61; David Hendy, *The BBC: A People's History*, p.257; David Hendy, Allies, *History of the BBC: The BBC and World War Two* (<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/allies>) 参照。
- 13 Asa Briggs, op.cit., p.589. 参照。
- 14 この時はまだ持ち運び可能な録音装置が開発されていなかったため、ディンブルビーは爆撃機から無線で実況を送ったものと思われる。
- 15 ディンブルビーに続いて数名のBBC特派員が空軍機からの実況を行うようになったが、そのうちケント・ステイブンスン（Kent Stevenson）はD-Dayの2週間後に、ガイ・バイアム（Guy Byam）は1945年はじめに搭乗機が撃墜されて殉職した。Robert Seatter, op.cit., p.63. 参照。
- 16 Robert Seatter, op.cit., p.60. 参照。
- 17 Ibid., p.60. 参照。BBCはこの種の直接的で最新で深みのある報道、手短かに言えば、マイクロフォンを戦闘のど真ん中に持ち込むような報道を望んだ。David Hendy, D-Day (<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/d-day>)
- 18 Tom Hickman, *What did you do in the War, Auntie? The BBC at War 1939-45*, BBC Books, 1995, p.166. 参照。
- 19 Ibid., p.166. 参照。
- 20 Ibid., p.167. 及び David Hendy, *The BBC: A People's History*, p.259. 参照。
- 21 Tom Hickman, op.cit., p.167. 参照。
- 22 David Hendy, *The BBC: A People's History*, pp.259-260. 及び Asa Briggs, op.cit., pp.591-591. 参照。
- 23 Tom Hickman, op.cit., p.167. 及び David Hendy, D-Day

(<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/d-day>) 参照。

<sup>24</sup> David Hendy, *The BBC: A People's History*, pp.258-259. 参照。

<sup>25</sup> Asa Briggs, op.cit., p.590. 参照。

<sup>26</sup> Tom Hickman, op.cit., p.172. 及び David Hendy, War Report

(<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/war-report>) 参照。1944年5月の終わりには14セットの「マイティ・ミジェット」が用意された。さらに37セットが4ヶ月以内に用意される予定だった。「戦争報道チーム」のメンバーはそれらの使い方の訓練を受けるためにウッド・ノートン (Wood Norton) へと移動した (ウッド・ノートンには戦時中、BBCの緊急放送センターが設置されていた)。Asa Briggs, op.cit., p.594. 参照。

<sup>27</sup> David Hendy, *The BBC: A People's History*, pp.260-261. 参照。

<sup>28</sup> Tom Hickman, op.cit., p.166. 参照。D-Dayの瞬間を報道するための「戦争報道チーム」のメンバーは、当初は英国と米国の部隊に組み込まれた。バイアムにとって、これは第6空挺師団とともに地上へパラシュートで降下することを意味した。マーシャルにとっては、機雷に触れた上陸用舟艇から浜辺へと歩くことを意味した。Robert Seatter, op.cit., p.63. 参照。

<sup>29</sup> David Hendy, *The BBC: A People's History*, p.270. 参照。

<sup>30</sup> Ibid., p.272. 参照。

<sup>31</sup> David Hendy, War Report (<https://www.bbc.com/historyofthebbc/100-voices/ww2/war-report>) 及び Andrew Crisell, op.cit., p.62. 参照。

<sup>32</sup> この他、第1話で放送されたかどうかは不明だが、「The BBC at War」には「戦争報道チーム」の出發から到着時にかけての2つの実況録音が収録されている。まず、6月6日の午前12時を回った頃、ディンブルビーがハーウェル飛行場 (Harwell airport) からノルマンディーへ向けて出撃する第6空挺師団の様態を実況している。

先頭を進んでいる航空機が一  
離陸のため滑走路の端に入ります  
乗せているのは落下傘兵  
そしておそらく希望と一  
不安と大勢の英国国民の祈りを乗せて  
今頃 人々は何も知らず眠っていることでしょう  
離陸しました  
この機が攻撃を先導するのです  
-リチャード・ディンブルビー (The BBC at War)

さらに、バイアムはパラシュートで降下する空挺部隊の様子を伝えつつ、自らもパラシュートで降下した。

ここは敵の上空  
赤や緑の光が見えます  
行け! 行け!  
フランスに降下します  
皆 戦場に飛び下りていきます  
しかし私は一  
落下傘の背負革に吊り下げた道具袋を下ろさねば  
地面が近づいてきました  
-ガイ・バイアム (The BBC at War)

<sup>33</sup> Tom Hickman, op.cit., pp.171-172. 参照。

<sup>34</sup> David Hendy, *The BBC: A People's History*, p.275. 参照。

<sup>35</sup> Ibid., p.276. 参照。

<sup>36</sup> James Curran and Jean Seaton, *Power without Responsibility: The press, broadcasting, and new media in Britain*, Sixth edition, Routledge, 2003, p.128.

<sup>37</sup> 第二次世界大戦中にナチス・ドイツが英国に対して1940年9月7日から1941年5月10日まで行った大規模な空襲。ブリッツはドイツ語で稲妻 (ナチス・ドイツの電撃戦) のこと。

<sup>38</sup> 北アフリカ戦線で枢軸国軍と戦った英国の軍団。

<sup>39</sup> 「ディエップ空襲」については、次の養葉の説明を参照 - 「一九四二年八月、連合軍はイギリス海峡に臨むフランス北西部の港ディエップのドイツ軍陣地を急襲する上陸作戦を敢行した。二年後一九四四年六

月のノルマンディー上陸のリハーサルになったともいえる作戦だったが、これは失敗に終わり、五千人の兵士のうち生還者はわずか四分の一だった。この作戦に従軍した BBC の特派員は、血に染まった海から兵士を引き上げる作業などを助けたが、目の当たりにした惨状を報道することを禁じられた。二四時間一言のレポートも許されず、最後に許されたのは頭上の空中戦だけだったという。」*叢葉*、前掲書、33 頁。

<sup>40</sup> Simon J. Potter, *This is the BBC: Entertaining the Nation, Speaking for Britain? 1922-2022*, Oxford University Press, 2022, p.106. 参照。

<sup>41</sup> 第二次世界大戦の西部戦線における戦闘の一つで、ドイツ軍のフランス侵攻の 1940 年 5 月 24 日から 6 月 4 日の間に起こった戦闘。輸送船の他に小型艇、駆逐艦、民間船などすべてを動員した史上最大の撤退作戦。

<sup>42</sup> Mass Observation, *The Press and Its Readers*, London, Art & Technics, 1949, p.41.

<sup>43</sup> 「ラジオ・ニュースリール」から「ウォー・レポート」への発展は、1942 年、北アフリカの砂漠での軍事作戦の初期に、ディンブルビーが非常に楽観的な戦況報告を電波に乗せた後、その放送を聞いた戦場の兵士たちとロンドンの戦争省が現状との違いに困惑したことにより、彼が英国に召還されたことがきっかけとなった。ディンブルビーは BBC のカイロ支局 (Cairo office) から報告を送っており、そのことが、過度に中東司令部 (Middle East Command) の高官たちによる誤解を招きかねないような戦闘概況 (briefing) に依存させることになり、結果としてかなりおおざっぱな報告しかできなかったことが原因であった。ディンブルビーの後任として派遣されたギラードとタルボットは、彼ら自身の目で見たことだけを報告する方が良いと判断したことが、「マイティ・ミジェット」や新しいコミュニケーション回路の開発へとつながったのである。David Hendy, op.cit., p.258. 参照。

<sup>44</sup> Andrew Crisell, op.cit., p.59. 参照。

<sup>45</sup> 「言葉の戦争」は、ブリッグスが著した英国放送史の基本的文献『英国放送史』全 5 巻シリーズのうちの第 3 巻の書名 (『言葉の戦争 1939-1945』) である。ブリッグスはこの書名を、第二次世界大戦中に英国外務省のもとに設置された、プロパガンダを担う政治戦執行部 (Political Warfare Executive: PWE) の部長を務めたロバート・ハミルトン・ブリュース・ロックハート (Robert Hamilton Bruce Lockhart) の自叙伝『勘定書きを出す』(*Comes the Reckoning*, Putnam, 1947) で使われている「言葉の争い」(wordy warfare) をより直接的に表現するものだと述べている。「言葉の戦争」には、できる限り事実を伝えるという方針に沿った戦争報道のみならず、英国社会に根強い「やつら」(them) 対「おれたち」(us) の分断において、これまで「やつら」の側として見られていた BBC を「おれたち」の目線に置くための方策、そして戦時であるが故に大衆の士気を持続するための娯楽の提供が含まれる。Asa Briggs, op.cit., p.3. 参照。

<sup>46</sup> David Hendy, *The BBC: A People's History*, p.279. 参照。

<sup>47</sup> 大石悠二「イラク戦争と「埋め込み」報道 — マスメディアの新しい役割 —」(『コミュニケーション科学』23 号、2005 年 12 月、東京経済大学コミュニケーション学会)、62 頁。

<sup>48</sup> 大石、前掲論文、63 頁。